

179
74
52

建長八年三月

至同十二月

東鑑

冊六

新刊皇鏡卷第四十六

建長八年丙辰

五月大

十月五日為康元之年

文庫

一日 癸巳天顏快晴 有境飯相州御之儀相州

奥州已下人々著布衣出仕各候庭上如例

前右馬權頭 武藏守 遠江守

尾張前司 越後守 相摸式部大夫

中務權太輔 相州右近大夫將監

越後右馬助 刑部少輔 遠江右馬助

陸奥弥四郎 同六郎 同七郎

足利二郎 同三郎 駿河四郎

尾張二郎 武藏四郎 同三郎

遠江太郎 越後又六郎 遠江七郎

備前三郎 畠山上野前司 長井太郎

秋田城介 遠江太郎 同三郎

長井三郎藏人 同判官代 出羽前司

赤泉前司 足利上總三郎 安藝前司

小山出羽前司 越中前司 大藏權少輔

若槻伊豆前司 那波左近大夫 前太宰少貳

新田三河守 嶋津大隅前司 三浦介

周防守 日向守 攝津大隅守

上總介 武藏右衛門尉

上野右衛門尉 大曾祢孫二郎右衛門尉

隱岐三郎右衛門尉 小野寺四郎左衛門尉

大須賀二郎左衛門尉 伊賀二郎左衛門尉

筑前二郎左衛門尉 七郎左衛門尉

肥後二郎左衛門尉 縫殿頭

和泉次郎左衛門尉 遠江三郎左衛門尉

式部太郎左衛門尉 鎌田三郎左衛門尉

小野寺新衛門尉 鎌田次郎兵衛尉

肥後々藤次 伯耆左衛門三郎

遠江十郎左衛門尉 武藤左近將監

上總太郎左衛門尉 大曾祢二郎兵衛尉

武藤左近將監 大曾祢五郎兵衛尉

出羽三郎 内藤権頭 伊勢二郎左衛門尉

遠江三郎左衛門尉

土屋弥三郎

鎌田新左衛門尉

土屋新三郎

平賀新三郎

今日雖申時尅將軍家依御歡樂被垂御簾御劔准
入簾中御劔前右馬權頭御弓箭武州朝直御行騰
出羽前日行義

一御馬 陸奥弥四郎時義 同六郎兵衛尉義政

二御馬 大曾祢次郎左衛門尉盛經

同五郎兵衛尉

三御馬 三浦三郎左衛門尉泰盛

同十郎左衛門尉賴連

四御馬 薩摩七郎左衛門尉祐能

同八郎祐代

五御馬 足利次郎兼氏

工藤次郎左衛門尉高光

二日 甲午 晴境飯與別沙汰 今日將軍家出御南面

土御門中納言與方辨直衣 後上御簾御劔武藏守朝直

御弓箭刑部少輔教時御行騰香秋田城介泰盛

一御馬 尾張次郎公時 同三郎賴章

二御馬 肥後次郎兵衛尉為時 伊東三郎

三御馬 三浦遠江三郎左衛門尉泰盛

同五郎左衛門尉

四御馬 上野太郎景經 梶原左衛門太郎景基

五御馬 陸奥弥四郎時茂 同七郎景時

三日 乙未 晴境飯足利三郎利氏 御簾黃門御劔

越後守實時御調度下野前司泰經御行騰和泉前
司行方

一御馬 越後又太郎 大平左衛門太郎

二御馬 遠江三郎左衛門尉泰盛

同十郎左衛門尉頼連

三御馬 梶原上野太郎景經

同左衛門三郎景氏

四御馬 尾藤次郎兵衛尉 備前左衛門三郎

五御馬 足利次郎兼氏 新田次郎

丙申 早且相列披覽御的始射手交名給

凡次一人也然勿茶否不一准所謂申領狀

早河次郎太郎 工藤八郎四郎

布施弥三郎 是本新共衛尉

平嶋弥五郎 摸溝七郎五郎

多賀谷弥五郎 小嶋又二郎

藤澤左邊將監 大瀬三郎左衛門尉

平新左衛門三郎 海野又四郎

澁谷三郎左衛門太郎 南條兵衛六郎

申障 遠江十郎左衛門尉

上野十郎朝村 小笠原孝次郎

出羽七郎 河野五郎兵衛尉行真

南條八郎兵衛尉 諏方四郎兵衛尉

南條左衛門二郎 以前故障蓋之中於朝村行真者無恩許可桑勤之

由於殿中直相觸之被召領狀奉詔是依堪能之越人也

五日丁酉天晴將軍家依可有御行始干相州御亭今日出仕衆八十五人之交名披覽之就御點以三十八人為供奉此事以前兩三年者相州令撰沙汰之給而於今者可被計下旨就令申之給今年始及御點云亭午之後出御供奉人 布衣下括

前右馬權頭

武藏守朝直

尾張前司時章

遠江前司時直

越後守實時

相摸右近大夫將監時定

刑部少輔敦時

尾張次郎公時

陸奥守四郎時茂

同六郎義政

同七郎業時

武藏五郎晴忠

遠江太郎清時

中務權大輔家氏

足利次郎兼氏

同三郎利氏

長井太郎時秀

出羽前司行義

前大藏權少輔朝廣

秋田城介泰盛

下野前司泰經

和泉前司行方

參河前司賴氏

大隅前司忠時

縫殿頭師連

遠江守光盛

上總介長泰

式部太郎左衛門尉光政

大曾祢弥四郎左衛門尉盛種

小野寺四郎左衛門尉通時

武藤左衛門尉景頼 同二郎左衛門尉頼泰

出羽三郎行咨 和泉二郎左衛門尉行章

隱岐三郎左衛門尉行氏

薩摩七郎左衛門尉祐能

鎌田三郎左衛門尉義氏

筑前次郎左衛門尉行頼

御引出物如例 御劔中務權大輔家氏砂金

刑部少輔教時 羽秋田城介泰盛

一御馬 尾張次郎公時

諏方三郎左衛門尉盛經

二御馬 遠江太郎清時 同次郎時通

三御馬 筑前次郎左衛門尉行頼 同三郎行實

七日 己亥 來十一日 為年始御神拜依可有御

衆鶴置八幡官被催供奉人各著布衣可參勤由云

九日 辛丑 於由比濱被撰御的射手左右各以

九人二五度被試之

一番 三日上野十郎朝村 早河次郎太郎

二番 大野新兵衛尉 平嶋弥五郎

三番 河野五郎兵衛尉 工藤八郎四郎

四番 布施三郎 横溝七郎五郎

五番 多賀谷弥五郎 藤澤左近將

六番 大瀬三郎左衛門尉 平新左衛門三郎

七番 小嶋弥二郎 南条兵衛六郎

八書

澁谷左衛門太郎

海野夫四郎

十日 壬寅天晴 於相州御亭有評定始前右典

厩已下著布衣出仕 盃酌如例御樂宮始明日必定

之間被催供奉人是著直垂令帶劔可奉仕之由云

太略進奉伊勢次郎左衛門尉者申所勞之由遠江

三郎左衛門尉者遂不申是非左右云御的始可為

求十三日仍昨日射手十八人之中叶清撰分十人

所被番五手也相觸之處各進奉云其狀書錄

右各來十三日如法卯尅以前可被參東御門陣

屋之狀依仰所迴如件

建長八年正月十日

十一日 癸卯天晴 辰尅太白見辰方終日出見

之經天也未克將軍家御樂鶴置宮

先御車

大會祢弥五郎兵衛尉 上總太郎左衛門尉

大曾祢左衛門太郎長賴 土肥四郎實經

隱岐二郎左衛門尉時清

大見肥後四郎兵衛尉行定

山内藤内左衛門三郎通廣

鎌田三郎左衛門尉 平賀新三郎惟時

土屋弥三郎 鎌田二郎兵衛尉行俊

肥後弥藤次

以上著直垂帶劔候御車左右

御劔役人

前右馬權頭

御調度役

隱岐三郎左衛門尉行氏

御後

刑部少輔教時

相摸式部大夫時弘

越後右馬助時親

陸奥弥四郎時茂

同四郎業時

尾張次郎公時

武藏四郎時仲

同五郎時忠

遠江太郎清時

駿河四郎垂時

備前三郎長賴

中務大輔家氏

足利三郎利氏

足利上総三郎滿氏

小山出羽前司長村

三河前司賴氏

出羽前司行義

秋田城介泰盛

和泉前司行方

長井太郎時秀

越中前司賴素

遠江守光盛

周防前司忠經

上総介長泰

大曾祢二郎左衛門尉盛經

式部太郎左衛門尉光政

肥後二郎左衛門尉為時

薩摩七郎左衛門尉祐能

和泉二郎左衛門尉行章

十二月 甲辰天晴 卯時尅於相列贅殿下部男

一入寢死可為卅箇日穢云

十三日 乙巳天晴 御前始射手十人二五度始

之云

一番 早河次郎太郎祐泰 平嶋弥五郎助經

二番 橫溝七郎五郎忠光

多賀谷弥五郎景茂

三番 河野五郎兵衛尉行真

工藤八郎四郎朝高

四番 藤澤左近將監時親

澁谷左衛門太郎朝重

五番 海野矢四郎資氏 里本新兵衛尉重方

十四日 丙午霽 與州被衆臺所前右典厩武川

已下評定衆等同以衆候與州被申云相州依三十

箇日穢氣不參而昨朝諸人不申予細而改入彼亭

間已鑑倉中觸穢也然者被出仕之條有何難哉云

仍以内藏權頭親家被召參河守教隆有御尋之處

彼真人申云於觸穢者吉事無憚至重輕服者吉事

有憚御出仕更不可有憚云仍以行義可令出仕給

之由被申相州云

十五日 丁未天晴 就仰今日相州令出仕給

十六日 戊申 越前兵庫助政宗^{年五}二番引付

右筆之辭

十七日 己酉 日向守祐泰有愁申事是將軍家

今年始被加御合點被計供奉人數事御之處上中

旬間已雖有兩度御出數輩五位六位之中一身漏

御點之條若有殊予細歟由周章云^云内々申相州何

事有之哉之由有仰子屬女房言上只自然漏畢歟
之旨被仰出云

二月小

十九日 辛巳天晴 丑尅雨降今日將軍多被始

二所御精進

廿四日 丙戌霽 右近大夫將監時定朝臣為二

所奉幣御使造發

廿九日 辛卯 自昨大雨降午尅洪水雷電二日

依雨及今日 二所奉幣御使時定朝臣歸參候

三月大

九日 庚子天晴 入夜雨降於鶴罷八幡宮被行

仁王會

十一日 壬寅天晴 宋刺雷鳴小雨酉刻與州辭

職令落飭給法名觀覺

十六日 丁未天晴 伊賀前司時家大倉家以東

三町餘人家皆燒亡又相州聊不例云

廿七日 戊午霽 左近大夫將監長時朝臣自京

都下著去廿日辭六波羅釐務出京云

廿日 辛酉天晴 今日前右馬權頭為與州出家

替連暑

四月小

十日 辛未天晴 武列前刺史禪室後室禪尼依

不食所勞逝去 年七十 相州依此事著服五十日御

服服云

十三日 甲戌天晴 未刻雨降塵異於四郎時後
主年十大 為供六波羅上洛

十四日 乙亥霽 與州奉權事之後有政所始之
儀

十八日 巳卯 駿河藏人二郎入小侍番張二番
云

廿七日 戊子天晴 今日陸與於四郎入洛嘗六
波羅北亭云

廿九日 庚寅天晴 三番引付頭人等事有其沙
汰今日所定之所謂武藏守朝直為一番引付頭前
尾張守晴章為二番頭越後守實時三番頭

五月小

一日 辛卯 引付等始行之云

五日 乙未 於御所內有和歌集會

六月小

二日 辛酉 與大道夜討強盜蜂起成往反旅人
之煩仍此間度々有其沙汰可致警固之旨今日彼

仰付于彼路次地頭等所謂

小山出羽前司

宇都宮下野前司

阿波前司

周防五郎兵衛尉

式家余三跡

壹岐六郎左衛門尉

同七郎右衛門尉

出羽四郎左衛門尉

陸奥留守兵衛尉

官城右衛門尉

和賀三郎兵衛尉

同五郎左衛門尉

葦野地頭

福源小太郎

澁江太郎兵衛尉

伊古宇又二郎

平間江地頭

清久右衛門二郎

鳩井兵衛尉跡

那須肥前守

宇都宮五郎兵衛尉

岩手左衛門太郎

岩手二郎

夫古字右衛門二郎

御教書云

御教書云

與大道夜討強盜事近年為蜂起之由有其聞是

偏地頭沙汰人等無沙汰之所致也早所領內宿

正之居豈有人可警固只有如然之輩者不嫌自他

一頭不可見隱之由被召住人等起請文可被致其

沙汰若尚被下知之旨今緩怠者殊可有御沙

汰之狀依仰執達如件

平建長八年六月二日

某做

五月甲子於御教書違背之咎者為令召可注

進所領之由可下知之旨所被相觸五方引付也

七日丙寅兩降凡今年大雨洪水殆越例年寒

氣又以不時暑不信其物定不長歎依之仰鶴是別

當僧正隆辨左大臣法印嚴惠筆所發行天下泰平

御祈禱也去寬喜二年之夏涼氣如冬天六七兩月

之間霜雪降八月大風是年國土飢饉民間傷死而

今時節不調不可不慎歟

八日 丁卯 尾張三郎平賴章卒 時章二男

十四日 癸酉 天晴 鳳已剋光物見長五尺餘其體

初者似白鷺後者如赤火其跡如引白布白晝光物

尤可謂奇特雖有本文所見於本朝無其例云又近

國同見云

廿一日 庚辰 相州姬君嘗魚味御

廿六日 乙酉 自去夜雷雨今日相州御除服始

今出仕給

廿七日 丙戌 雨降奥州禪門息女 宇部宮七郎

卒去々此流產其後煩赤痢病云

廿九日 戊子 放生會御祭宮供奉人事越州任

例注惣人數申下御點 百令

御點散狀 次第不同

陸奥守 同三郎 五箇門係

武藏守 同太郎 二河門係

同四郎 同五郎

同八郎 北條六郎 歸係

遠江前司 同太郎 相摸右近大夫將監

同次郎 同六郎

陸奥左近大夫將監 同六郎 越後右馬助

同七郎 同七郎 遠江七郎

刑部少輔 同七郎 相摸式部大夫

越後守 同八郎 駿河四郎

同八郎

備前三郎

上野前司

同三郎

中務權大輔

足利次郎

同三郎

上総三郎

佐渡前司

同五郎左衛門尉

出羽前司

同次郎左衛門尉

同三郎左衛門尉

同七郎

城次郎

武藤少丞

同二郎兵衛尉

秋田城介

千葉介

遠江守

同三郎左衛門尉

三浦介

同五郎左衛門尉

長井太郎

前太宰少貳

同七郎左衛門尉

同五郎左衛門尉

同六郎左衛門尉

同六郎左衛門尉

同五郎左衛門尉

同四郎

同四郎左衛門尉

同三郎左衛門尉

同二郎左衛門尉

同四郎

同二郎左衛門尉

同四郎

同二郎左衛門尉

同四郎

同二郎左衛門尉

同四郎

同二郎左衛門尉

同四郎

同二郎左衛門尉

同四郎

肥後二郎左衛門尉

同四郎兵衛尉

薩摩七郎左衛門尉

和泉五郎左衛門尉

同六郎左衛門尉

肥後次郎左衛門尉

狩野五郎左衛門尉

同太郎

足立太郎左衛門尉

信濃四郎左衛門尉

武藤右近將監

土肥三郎左衛門尉

同二郎兵衛尉

同四郎

阿曾沼小次郎

伊豆太郎左衛門尉

同二郎左衛門尉

宇都宮五郎左衛門尉

茂木左衛門尉

常陸太郎左衛門尉

同八郎左衛門尉

同修理亮

常陸二郎左衛門尉

佐竹六郎

山内新左衛門尉
山内藤内左衛門尉

大須賀二郎左衛門尉
同新左衛門尉

紀伊二郎左衛門尉
河越次郎

中山左衛門尉
小山七郎

進三郎左衛門尉
伯耆三郎左衛門尉

同三郎
風早太郎

澁谷左衛門尉
伊東八郎左衛門尉

遠江大炊助
伯耆四郎左衛門尉

相馬次郎兵衛尉
同孫五郎左衛門尉

藥師寺阿波四郎兵衛尉

千葉七郎太郎
淡路又四郎

式部太郎左衛門尉
同兵衛次郎

同二郎左衛門尉
同三郎左衛門尉

下野前司
同四郎

同七郎
和泉前司

同二郎左衛門尉
小山出羽前司

伊豆守
日向守

河内守
同三郎左衛門尉

筑前守
同二郎左衛門尉

上総介
同太郎左衛門尉

大隅前司
同修理亮

周防守
同三郎左衛門尉

梶原上野介
同太郎左衛門尉

越中前司
同左衛門尉

新田參河前司

佐々木壹岐前司

那波左近大夫

同太郎

伊賀前司

後藤壹岐前司

同新左衛門尉

安藝前司

同右近大夫

長門守

伊勢前司

對馬守

大隅前司

縫殿頭

能登右近大夫

同右近藏人

大曾祢二郎左衛門尉

同太郎

周防修理亮

小野寺四郎左衛門尉

同新左衛門尉

伊賀次郎左衛門尉

足立二郎左衛門尉

同三郎

武石四郎

同三郎左衛門尉

淡路五郎左衛門尉

鎌田三郎左衛門尉

大曾祢五郎兵衛尉

押垂左衛門尉

平賀新三郎

遠江十郎左衛門尉

鎌田次郎兵衛尉

内藤肥後三郎左衛門尉

内藤豐後二郎左衛門尉

江戸七郎

小田左衛門尉

常陸二郎兵衛尉

式部八郎兵衛尉

長掃部左衛門尉

同長次郎右衛門尉

内藤肥後六郎

弥四郎左衛門尉

同新衛門尉

七月六

五日 癸巳 尾張右衛門太郎同子息五郎可入

小侍番張之由景頼申沙汰之達小侍云

六日 甲午 朝雨辰尅屬霽夕又雨降今日為前

武藏障室後室禪尼被供養一切經導師若宮別當

僧正隆辨云又六波羅大夫將監長時朝臣室重病

放生會御立隨兵今日迴散狀是注惣人數申下

御點云今度雖載風記漏

御點人之

武藏太郎

同五郎

同八郎

遠江次郎

出羽三郎左衛門尉

大隅修理亮

周防三郎左衛門尉

越中右衛門尉

阿曾沼小太郎

武石四郎

十二日 庚子天晴 去六月十四日光物見男山

之由別當申之自仙洞有御尋之處司天等依申不

伺見之由同白石清水令注進其圖云又大宮院新

造御所五條大宮今月三日御移徙兩院同車一負御幸

云 十七日 乙巳天晴 將軍家御衆山内最明寺此

精舍建立之後始御礼佛也相州可被遂御素悻之

由内々有其沙汰依惣食被餘波歟殊被刷今日御

出行列先隨兵十二人 騎馬

足利太郎兼氏

遠江三郎左衛門尉泰盛

武田八郎信經

小笠原三郎時直

城次郎頼景

下野四郎景經

河越次郎經重

大須賀次郎左衛門尉胤氏

小山出羽前司長村

佐々木對馬守氏信

北条六郎時定

武藏四郎時中

次御車綱代庇

大隅修理亮

出羽三郎左衛門尉行資

相馬二郎五衛尉胤繼

武石四郎胤氏

小野寺新左衛門尉行通

隱岐二郎左衛門尉時清

山内藤内左衛門尉通重

平賀新三郎惟時

三浦介六郎頼盛

城四郎時盛

周防五郎左衛門尉忠景

出羽七郎行頼

肥後二郎左衛門尉為時

南郷又二郎時實

大須賀左衛門四郎朝氏

近江孫四郎左衛門尉恭信

氏家余三經朝

士肥四郎實經

波多野小二郎實經

鎌田次郎兵衛尉行俊

次御劔役人

遠江太郎清時

次御調度役

小野寺四郎左衛門尉通時

次御後供奉女二人

各布衣下括馬
武官皆帶弓箭

越後守實時

刑部少輔教時

足利三郎利氏

備前三郎長頼

長井太郎時秀

新田參河前司賴氏 佐々木壹岐前司泰經

和泉前司行方

内藏權頭親家 伊勢前司行經

上総介長泰 武藤少卿景頼

筑前二郎六衛門尉行頼

河内三郎五衛門尉祐次

式部太郎左衛門尉光政

出羽次郎左衛門尉行有

和泉三郎左衛門尉行章

上野五郎兵衛尉重光 壹波新左衛門尉基頼

小田左衛門尉時知 善左衛門尉康長

大薩摩七郎左衛門尉祐能

次小侍所司

平置左衛門尉實俊

與羽相州被候堂前又武藏守遠江前司出羽前司

佐渡前司三浦介等同衆候大夫尉泰清時連等豫

於門外左右搆敷皮御礼佛之後入御干相州御亭

廷尉行忠 布衣冠 參會此砌有御遊和歌御會等今

日御逗留也

十八日 丙午天晴入夜雨降將軍家自山内還御

御導師左大臣法師嚴惠

廿日 戊申 將軍家有御惱云云

廿六日 甲寅天晴 度々變異等事可波行御祈

禱旨可計之由為和泉前司行方清左衛門尉滿定

等奉行被仰諸道仍陰陽師等群舉前陰陽樞大允
晴茂朝臣可被行雷公祭由申之天文博士為親朝
臣申云此系公家之外不聞彼行之例去寬喜三年
依前武州禪室之仰亡文恭貞行風伯祭翌日風休
止任其例可必行此祭歟云晴茂朝臣重申云如諸
國受頒行之例途覽親職自筆狀行方披露之處難
被決斷之間被問右京權大夫茂範朝臣參河守教
隆等茂範朝臣申云去寬喜三年被真行彼祭之時
被尋安賀兩家之處安家者不覺悟之由申之陰陽
頭賀茂在親朝臣以後憲朝臣勤仕之例奉仕之其
外例不存知之云教隆真人申云凡人勤仕之例更
以無所見云依之不可被行之由被定之云

廿九日 丙戌天晴 貢馬御覽與州已下數筆出

十一月大

二日 巳丑陰 丑尅六波羅飛脚祭著去月廿七

日遷化 院衲林 將軍家御輕服仍所被閣政務也 七

舊日

三日 庚寅 相州令煩赤痢病給

十一日 戊戌天晴 戌尅將軍家有御除服之儀

天文博士為親朝臣東帶勳御杖六角侍從之為陪

膳源式部大夫觀行僕役送太宰權少貳景賴奉行

之 十八日 乙巳陰 申尅雨降雷鳴數聲

廿二日 巳酉 相州赤痢病事減氣云今日被讓

執權於武州長時又武藏國務侍別當弁錄倉第內

同被預申之但家督幼稚程之暇代也

次三日 庚戌天晴 寅尅於最明寺相州令落饌

給依年依日來紫懷也御法名覺了房道崇云御戒師

宋朝道隆禪師也依此事名家兄弟三流既為沙弥

希代珍事也所謂前大藏權少輔朝廣法名信佛上

野四郎左衛門尉時光法名同十郎朝材法名連恩

名元弟遠江守光盛法名三浦介盛時法名大夫判

官時連法名前筑前守行泰法名行善前

伊勢守法名信濃判官行忠法名行一以上信濃彼

面々有所慕年來無貳斯時思名殘之餘忽顯此志

廿九日 丁巳 放生會御祭宮供奉人事迴散狀

之其狀兩樣也所謂一通方各著布衣可供奉之由

云一通方著直垂可供奉之由云其體雖為兩樣於

散狀者數通書分之彼相觸云日來又所催促也其

中申障之葦相交所謂

隨兵

島山上野町司 三浦介 土肥三郎左衛門尉

小田左衛門尉

遠江十郎左衛門尉輕服

直垂

出羽七郎左衛門尉所勞之由申

足立左衛門四郎依所勞七月

周防三郎左衛門尉

父周防守著布衣可供奉由進長畢第六年又為流鑄馬射手旁依令見沙汰難察之由申

神馬役事

上野太郎左衛門尉 進奉

弥二郎左衛門尉 稱內之仰差進子息新左衛門尉云

八月小

六日 甲子 甚兩大風河溝洪水山崖大頽毀男

女多橫死云

八日 丙寅陰 依去六日大風田園作毛等悉損

亡之由近國申之今日信深僧正道禪入滅 年八十

九日 丁卯 武州室所勞氣之間有沐浴之儀

云

十一日 己巳 雨降相洲御息被加首服号相摸

三郎時利 後改持轉 加冠是利三郎利氏 後改利氏

十二日 庚午天晴 來十六日競馬役事仰相州

已下諸方被召強力董此程令習彼藝亦御隨身格

勤等之中被撰堪能者爰左右事秦弘真種又行久

等顯申子細而侍與隨身如馬打之相論雖有子細

在院御例以可為左之由被定云

十三日 辛未 明後日御樂宮供奉人等之中帶

釵者依有故障之輩重相催之

近江孫四郎左衛門尉 山内三郎左衛門尉

平賀新三郎 已上三人進奉

阿曾沼五郎 大曾林左衛門太郎

已上二人申障云

十五日 癸酉 小雨降北風烈今日鶴正八幡宮

放生會將軍家御出

先檢非違使三人

佐々木隱岐大夫判官泰清

三浦遠江大夫判官時連 信濃判官行忠

次先陣隨兵十人

三浦遠江三郎左衛門尉泰盛

相馬弥五郎左衛門尉胤村

佐渡五郎左衛門基隆

出羽次郎左衛門尉行有 武藤次郎兵衛尉頼泰

上総大郎兵衛尉長経

河越四郎經重 和泉三郎左衛門尉行章

備前三郎長経 足利次郎兼氏

次先駟八人

次殿上人十人

次御車

善次郎左衛門尉康有

隱岐次郎左衛門尉時清

後藤壹岐左衛門尉基頼

内藤肥後六郎左衛門尉時景

近江弥四郎左衛門尉泰信

山内三郎左衛門尉通廣 鎌田三郎左衛門尉義長

士肥四郎實經

大須賀左衛門四郎朝氏

肥後四郎兵衛尉行定

鎌田次郎兵衛尉行俊 平賀新三郎惟時

以上著直垂帶劔候御車左右

御劔役人

刑部少輔教時

御調度役

小野寺四郎左衛門尉通時

次御役

五位十五人 布衣下拵

越後中實時

越後右馬助時親

中務權大輔家茂

出羽前司行義

後藤壹岐前司基政 佐々木壹岐前司泰經

三河前司頼氏 那波左近大夫政茂

和泉前司行方 越中前司頼業

周防前司忠經 伊勢前司行經

上総介長泰 對馬守氏信

武藏少卿景頼

六位十人 布衣下拵

足利上総三郎滿氏 長井太郎時秀

式部太郎左衛門尉光政

伊賀次郎左衛門尉光房

薩摩七郎左衛門尉祐能

大曾祢次郎左衛門尉盛經

鏡前次郎左衛門尉行賴

善十衛門尉康長長小野寺新左衛門尉行通

善弥太郎左衛門尉

次後陣隨兵十人

遠江七郎時基

武藏四郎時仲

上野五郎兵衛尉重光

足立太郎左衛門尉直元

常陸次郎兵衛尉行雄

武石三郎左衛門尉朝胤

伯耆新左衛門尉清經

河内三郎左衛門尉祐次

城次郎賴景

大須賀次郎左衛門尉胤氏

御奉幣之後於迴廊覽舞樂其結構與例年陸奥守

被候其所此外豆前司賴定前大宰少貳為佐出

羽前司行義刑部大輔入道成猷常陸入道行日等

同參加云申尅還御之後六波羅飛脚參著前將軍

入道前大納言象去十一日依御痢病薨御之由申

之 十六日 甲戌陰 將軍家御出流鑪馬射手已下

役殊被撰其人所謂相摸三郎時利陸奥六郎義政

足利三郎利氏武藏五郎時忠三浦介六郎賴盛等

為其最又競馬五番

左近持富所左衛門尉

一番

右村照跡三郎

三處之後右好而在外空馳及數度左追表手前取合落馬富所自額血出

左

當麻右馬五郎

二番

右追勝

檢伏三郎

左先出互相競各空馳二度右追下手無程馳追當麻擬取鞅合取拔畢

左進持

下条四郎

三番

右

秦弘負

下条追之暫不得相並但於勝負拂內取

之弘負離馬懷共落馬而左勝之由雖有

沙汰右額申子細祿畢

左進持

澁谷右衛門三郎

四番

右

秦種久

右先出之遲之間左追之即取之拂脇種

又離馬取澁谷腰共落馬左顯勇力右存

故無太有其真

左追勝

烏子左衛門次郎

五番

右

秦行久

右先出空馳度之左追之行久不合鞭止

畢是怖為子之勇力之故也

廿日 戊寅 新奧州元前右馬 奉執權事之後將

軍家始可有入御于彼御常業別業之由日來有其

沙汰治定既依可為來廿三日今日被催供奉入其

散狀披覽之於御前故障之替已下有被相加事

足利次郎 遠江次郎

佐渡五郎左衛門尉 可催加之也

常陸次郎兵衛尉 申所勞之由以善次郎左衛門尉可為其替者

廿三日 辛巳天晴 將軍家入御于新奧州常業

第已刻御出 御水干馬 谷古衛門三郎

供奉人 太古衛門中七郎尉畢

步行

御劔 進奉不衆

備前三郎長賴 城四郎時盛

佐渡五郎左衛門尉基隆

式部太郎左衛門尉光政

常陸次郎兵衛尉行雄

薩摩七郎左衛門尉祐能

武藤右近將監兼賴 和泉二郎左衛門尉行章

武藤二郎左衛門尉賴泰

後藤壹岐新左衛門尉基隆

小野寺新左衛門尉通行

隱岐三郎左衛門尉時清

善二郎左衛門尉康有

鎌田三郎左衛門尉義長
土肥左衛門四郎實經
鎌田二郎左衛門尉行俊
騎馬

土御門中納言顯方卿

花山院宰相中將長雅卿
武藏守長時

越後守實時
刑部少輔教時

尾張左近大夫將監公時
足利二郎兼氏

同三郎賴氏
陸奥七郎業時

武藏五郎時忠
和泉前司行方

長井六郎時秀
三河前司賴氏

佐々木壹岐前司兼經
後深壹岐前司基政

筑前令司行泰
出總介長泰

武藤少卿景賴
城次郎賴景

出羽三郎左衛門尉行資
下野四郎景經

陸奥入道 興州
尾張前司 出羽前司

等濲候波亭先入御出居其所立衣架被懸御服半

尻狩御衣浮泉綾御水干袴地白青色々御水袖十

具御帷五等也御棚居八合菓子又卷絹三十疋紺

布三十擅紙百帖扇五十本積廣盖次供御立大本次

供盃酒三献之後渡御泉屋以金銀以下作屋形形

次女房一条殿近衛殿別當殿新右衛門督局兵衛

督局小督局右衛門佐局兼濃局等樂上及晚被奉

金五十兩色々紺帷三十錦一瑞具後一波置此所
端南延三絹三十黒二紫絹五十本等也

御引出物刑部少輔教時持參御釵并作金五十兩
置銀陸奧七郎葉時役之南廷五置銀足利三郎利
氏持參之次御馬二疋

一御馬置鞍陸奧三郎時村

式部太郎左衛門尉光政

二御馬 出羽三郎左衛門尉義賢

同七郎行賴等引之

女房贈物衣今木小袖帷等也御共侍各各行騰也

廿四日 壬午霽 將軍家御惱與州相州已下群

衆

廿六日 甲申陰 御惱增氣之間若官別當僧正

隆辨修不動護摩又於御所被行泰山府君祭晴茂

朝臣奉仕之出羽前司行義為奉行

廿九日 丁亥 終夜雨降依御惱事重有御祈大

土公資俊靈氣泰繼四角宣賢晴長晴秀晴成四堺

晴尚親貞維行重代等也

九月大

一日 戊子霽 將軍家御惱赤斑瘡也若宮別當

僧正參籠宮寺致御祈禱此事當時流布諸人不免

之為祈禱於諸堂被行百座仁王講清左衛門尉滿

定奉行之

三日 庚寅天晴 又有御惱御祈等松殿法印良

基左大臣法印嚴惠各修藥師護摩七座泰山府君

宣賢為親晴長廣資以平晴憲晴宗此外被行七座

靈所按天曹地府御當年星死相等祭

十日 丁酉 於相州第被轉讀大般若經云

十五日 壬寅陰 相州令惱赤斑瘡給

十六日 癸卯 朝間雨降及晚相州御不例事去

六月廿六日當御衰日始今出仕給之間今御不例

可有其慎之由陰陽道勘申之仍被行泰山府君祭

又相州女子有赤斑瘡邪氣相交云

十九日 丙午 甚雨降申剋將軍家御沐浴陰陽

少允晴宗候御身固陰陽醫師權侍醫長世賜祿中

衛門少將公仲朝臣取御衣五單御劔金作等次給

御馬武部太郎左衛門尉光政引之於東屏中門之

內此儀今日武州嫡男四歲赤斑瘡云

廿五日 壬子陰 相州御不例平愈之間始令洗

手足給

廿八月 乙卯 越後守室赤斑瘡所勞云

廿九日 丙辰天晴 相州御沐浴

卅日 丁巳陰 民部大夫康連依病痢危急辭問

注所執事子息康宗補其闕

十月大

二日 己未天晴 六波羅飛脚參著去月廿七日

四宮惟尊薨御又廿四日前將軍三位中將家御早

世之由申云

三日 庚申天晴 散位從五位上三善朝臣康連

卒年六十四

九日 丙寅 天晴 南風入夜雨降改元詔書到
來去五日改建長八年為康元七年同日相國御息
女遷化云

十三日 丙辰 相州姬君卒去日來有御祈禱日
光法印尊家 被修愛染王供法印清尊為千手阿闍

梨兼驗者各有事已後破壇退出云

廿三日 庚辰 右近大夫將監時定朝臣依素懷

遂出家云

廿六日 癸未 天晴 依四宮御事并相州輕服三

嶋御神事已下皆被停止之為大宰權少貳景賴奉

行名參河守教隆彼問可有御除服否申云彼官御

年三歲也七歲以前無重輕服仍被止此儀云

北九日 丙戌 天晴 貢馬御覽奧州已下數輩出

仕

十一月大

二日 巳丑 陰 丑刻六波羅飛脚參看去月廿七

日遷化 院御妹 將軍家 仍所被閣政務也七

簡日

三日 庚寅 相州令煩赤痢病給

十一日 戊戌 天晴 戌尅將軍家有御除服之儀

天文博士為親朝臣束帶勤御被六角侍從之為陪

膳源式部大夫親行候役送太宰權少貳景賴奉行

之 十八日 乙巳 陰 申尅雨降雷鳴數聲

北二日 巴西 相州亦痢病事減氣云今日被讓

執權於武州長時又武藏國務侍別當并錄倉第內

同被豫申之但家督幼稚程之暇代也

北三日 庚戌天晴 寅刻於最明寺相州令落飭

給世年依日來素懷也御法名覺了房道崇云御戎師

宋朝道隆禪師也依此事名家兄弟三流既為沙彌

希代珍事也所謂前大藏權少輔朝廣法名信佛上

野四郎左衛門尉時光法名同十郎朝村法名蓮忍

各兄弟法名遠江守光盛法名三浦介盛時法名大夫判

官時連法名三浦各兄弟法名前筑前守行恭法名行善前

伊勢守法名行願信濃判官行忠法名各兄弟法名一法名以上信濃彼

面々有所募無年來貳斯時思名殘之餘忽顯此志

但皆被行自由之過可止出仕之由云

廿四日 辛亥 武州奉執權事之後始被衆政所

與州并評定衆等各布衣衆會

廿六日 癸丑 夕雨降寅刻名越燒亡備前三郎

長賴亭災哭不及他所

廿八日 乙卯陰 小雨洒今日評定武州始出仕

給申克前佐渡守正五位下藤原朝臣基經卒年十六

廿日 丁巳天晴 最明寺禪室令始行逆修給

十二月小

十一日 戊辰天晴 亥刻右大將家法華堂前燒

亡北風烈吹勝長壽院并弥勒堂五佛堂塔悉以火

但本尊及一切經等希有而奉取出之云

十三日 庚午 明春正月御的始射等被差定
之被下御教書越後守奉行也

十九日 丙子 天晴 戌刻雷鳴數聲

廿日 丁丑 就六波羅同注条々有被仰遣事

一 日可被書同者署所事

一 兩方所進證文等各可對繼目事

一 八同文書目祿巨細可被注進事

一 莊園領家事

雖被載本寺社之名不被注領家之間聊涉不

審問注記端作雖不被出之申詞之注

可被書載之

一 可書正地頭交名事

其庄地頭 某土 載 天 不書正地頭之間聊涉不審

地頭 某 代官 某土 正負代官共以可被書之矣

一 条々各別可立寫目事

一段内條々相交之間御念々之時難得細心

一 事一段 仁天 兩方申狀詞別々 仁 可被書加

也

一 以問注記下沙汰人令勘理非之處甚數輩之中

於緣者之令起其墜畢而其外或号先論入又稱前

之緣者嫌甲沙汰人之事御評定之時用捨何様被

定作覽不審事候之間内々尋申候委可蒙仰候焉

廿五月 壬午 小侍所番帳事有其沙汰於廂等

近々事者於御前直宜有御計小侍所者本所也為

